

ウィリアム・ハーディ・マクニール 佐々木昭夫訳

『疫病と世界史』(上下巻)

中公文庫、二〇〇七年、ISBN 978-4-12-204954-3

定価本体 一四三円＋税

遠山 茂樹

本書の原題は、*Plagues and Peoples*, Anchor Press, first published 1976で、最初の翻訳は一九八五年に新潮社から刊行されたが、上下二巻に分け、原著に新たに付け加えられた「序」をくわえて文庫(上下巻)にしたのが本書である。

まず、著者ウィリアム・ハーディ・マクニール(William Hardy McNeill)について簡単に紹介すると、一九一七年にカナダのバンクーバーに生まれ、シカゴ大学で一九三八年に学士号、一九三九年に修士号を取得し、一九四七年にコネル大学で博士号を取得している。一九八七年にシカゴ大学を退職するまで、四〇年間にわたって同大学歴史学教授として教壇に立ち、一九八五年には American Historical Association の会長をつとめた。執筆活動も旺盛で、二〇冊以上もの単著があり、そのなかには『戦争の歴史』など既に邦訳されているものも何冊がある。一九九六年にはエラスムス賞を授与され、かのアーノルド・トインビー以来のスケールの大きな歴史家として知られている。

疫病の流行は、ときに歴史の流れを大きく変え、文明の興亡に重大な影響を及ぼしてきた。中世末期のヨーロッパを襲ったペスト、いわゆる「黒死病」<sup>フランジデス</sup>は、その好例として人口に膾炙している。本書『疫病と世界史』は歴史の裏側に潜む疫病に焦点をあて、人類の歴史を見直した、すこぶる刺激的な著作である。今でこそ、病の歴史はさほど珍しくないが、本書は歴史家をして病の歴史へと目を向けさせることになった、画期的な著作であると目されている。

.....

著者の言葉を借りれば、「本書の目指すところは、様々に変化する病気の伝播<sup>でんぱ</sup>のありようが、いかに古代から現代まで一貫して人間世界の出来事に大きく影響し続けてきたかを示すことによって、感染症の歴史を歴史学的説明の場に引き入れよう」(上巻、一九〇三頁)とすることにある。ペストや天然痘あるいはコレラといった疫病が、いつ、どこで発生し、どのような経緯で伝播していったか、それに対して人や社会はどう対応してきたか。ひとくちに言えば、疫病が人間の歴史形成にどのようにかわつてきたのか、その具体的諸相を描いたのが本書である。

卑近な例からはじめよう。通常、われわれは歴史の授業において、メキシコのアステカ帝国を滅ぼしたのはコルテスであり、南米のインカ帝国を滅ぼしたのはピサロであると習う。両者はいずれもスペイン人で、いわゆる「征服者たち」(コンキスタドールス)の典型とされている。しかし、ここでふと疑問に思う。わずか数百名ほどのスペイン人によって、何ゆえに何百万もの人口を擁する帝国が滅ぼされたのか、と。通説にいう馬や火器の威力には限界があるう。では、帝国滅亡の決定的な要因は何か。マクニールによれば、それこそが疫病にほかならない。

具体的にいえば、天然痘が蔓延しなければ、コルテスの勝利もありえなかった。天然痘がイスパニョーラ島に到着し、先住民に襲いかかったのは、一五一八年のことである。その後、この悪疫はメキシコに上陸し、アステカ帝国の首都ティノチティトランで突発する。天然痘は、決してアステカ帝国領内でのみ猛威を振るつたわけではなかった。一五二〇年にはグアテマラに広がり、さらに南下を続けて、一五二五年か二六年にはインカ帝国領内に侵入

した。

このように、著者マクニールは天然痘の侵入経路や蔓延の経緯を克明にたどる。いうまでもなく、疫病は人為的な国境を越える。ピサロがインカの首都クスコに到着したときには、まともな軍事的抵抗にはろくに遭遇しなかったという指摘は、なにやら意味ありげである。

疫病がインディオに対して与えた心理的影響も見のがせない。著者によれば、悪疫を神の怒りのあらわれであるとする点で、換言すれば、疫病は神罰であるとする点で、インディオもスペイン人も共通していた。ところが、侵略者のスペイン人は、インディオに猛威をふるった恐るべき疫病の影響を全くといっていいほど受けなかった。天然痘が突発したという事実は、インディオたちからみれば、スペイン人を襲撃した自分たち自身への神罰と受けとめざるを得なかった。「神は白人には恩寵を垂れ給い、一方、神の怒りはひたすらインディオにのみ向けられた」（下巻、九四頁）のである。

疫病に対する免疫を獲得していたスペイン人は平気である一方、免疫のないインディオたちは、なすすべがなかった。その結果、インディオたちはみな氣力を沮喪させられ、スペイン人の優越性を黙認せざるを得なくなった。かくして、インディオは文化的・宗教的にもスペイン人の支配に屈することになったと著者は説く。スペイン人による征服は、決して武力によるものではなく、疫病によるものであった。それは文化的領域にまで及んだのである。

.....

次に、ペストに話題を移そう。ペストはペスト菌、ノミ、ネズミ、人間という四つの生物体が存在するところに発生する。この疫病は有史以来、世界各地で何度か流行したが、とりわけ一四世紀半ばのヨーロッパを襲ったペストによる被害は甚大であり、「黒死病」<sup>ブラック・デス</sup>の名で知られている。

マクニールによれば、ペストの本拠地のひとつはインド、ビルマ、中国が境を接するヒマラヤ山麓で、そこからユー

ロシアの広大な大草原に広がった。著者はペスト流行の前提として、モンゴル帝国による征服活動ならびに東西交通の発展を指摘し、興味深い叙述をおこなっている。

モンゴル軍は、一二五二年に初めて中国南部の雲南省とビルマに侵入するが、そこは古来ペストの中心地であった。侵入したモンゴル軍は、感染したノミとともにペスト菌を故郷の中央アジアに持ち帰った。かくして、中央アジアの草原地帯に生息する齧歯類がペスト菌を宿すことになる。その後、ペストは中央アジアを起点として、一三三一年以降中国へ伝播し、さらに黒海地域を経由してヨーロッパに波及していった。

ペストの格好の通り道になったのが、広大な地域に点在していた隊商基地であった。隊商の宿泊所には多くの旅人やラクダに食わせるために、相当量の食糧が貯蔵されていた。それを目あてにネズミも集まるが、ネズミにたかるノミも数知れない。まことに、隊商基地はペストの温床でもあったのだ。

ユーラシア大陸の草原地帯からやってきたペスト菌は隊商路を旅し、一三四七年にクリミア半島に到達する。だが、ペストがヨーロッパにおいて猛烈な破壊力を発揮するには、それに先立って二つの条件が満たされなければならなかったと著者はいう。ひとつは、ノミを宿しているクマネズミがヨーロッパ全土に分布していること。もうひとつは、地中海世界とヨーロッパ北部とを結びつける船舶の航路網、換言すれば、交易網が成立していることである。それによって、ペスト菌に感染しているネズミとノミをあらゆる港に運ぶことが可能になった。否、クマネズミのヨーロッパ北部への分布自体、地中海と北方諸港を結びつける航路網のおかげだったと推測されている。

ところで、周知のように、黒死病が発生したときには、スケイプゴートとしてユダヤ人の大虐殺がおこなわれた。著者は、このときのドイツ系ユダヤ人への攻撃はユダヤ人社会の中心地の東方への漸進を加速させ、結果として東欧ユダヤ人社会の発展をもたらしたという。なるほど、マクニール流に言えば、東欧ユダヤ人社会の発展も、黒死病に因るところ大であったというわけである。ヨーロッパでは、マルセイユ・ペスト（一七二〇―二二年）を最後に、ペストは姿

を消す。このときのペストを契機に、『ロビンソン・クルーソー』の作者として有名なダニエル・デフォーは『疫病流行記』（一七二三）を執筆した。これはまったくのフィクションであるが、デフォーはこの本の執筆に際して、当時の史料にあたっていたものと思われ、歴史学の分野では、病の社会史の先駆者として再評価されている。

それはさておき、注目すべきは、地中海世界の諸民族にとって六・七世紀のペストがもつ意味は、周知の一四世紀の黒死病とまったく等しかったという著者の指摘である。広い視野に立ってみれば、「ヨーロッパ文明を代表する中心地としての地位が地中海世界から次第に失われ、もっと北の諸地方の重要性がはつきり増大していったという転換には、長い間繰り返されたペストの流行が果たした役割が非常に大きい」（下巻、二〇九頁）。地中海世界からヨーロッパ北部へという、文明の中心の移動にペストの流行が大きく関わっていたとマクニールはみる。こうした大局的な見地に立った文明観も興味深い。筆者はこのくだりを読みながら、なぜかピレンヌ・テーゼを思い浮かべた。

世界史的にみると、ペストは一九世紀にも猛威を振るった。一八九四年、広州と香港で爆発的な感染をみたペストは、両港湾都市のヨーロッパ人居留地をも恐怖に陥れた。と同時に、伝染の謎解きがはじまり、二人の細菌学者がペスト菌を発見することになる。フランス人のアレクサンドル・イエルサンと北里柴三郎である。北里は一八九四年に香港に赴き、ペスト菌を発見したのである。その後、このペストは台湾、日本、ハワイ、北アメリカへと東進し、東南アジアを経てインド、アフリカにも波及していった。その背後には、一八七〇年代になって急速に発達した汽船の航路網があった。著者は、汽船が地球全体にペストをまき散らす格好の伝達手段になったという。帆船から汽船への転換は、他方でペストの伝播に一役買っていたのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ペストもさることながら、一九世紀を代表する最も衝撃的な疫病はコレラであった。コレラは大昔からベンガル地方（インダス河下流）に風土病として根づいていた。この疫病がヨーロッパ人の注意を引いたのは、一八一七年にカルカ

ツタとその周辺地域に発生し、猖獗を極めたときであった。

流行は陸路と海路の二つの道筋をとった。陸路についていえば、一八一六年から一八一年にかけて、インド北部国境地帯で軍事活動を行っていたイギリス軍が敵のネパール人とアフガン人に感染させた。海路による伝播はそれよりもはるかに劇的で、範囲も大きかった。一八二〇年から二二年の間に、コレラは海路、セイロン、インドネシア、東南アジア、中国、日本に伝播した。さらに、アラビア半島、アフリカ東海岸を漸次南下していった。一方、ペルシア湾にも浸入し、イラン、シリア、アナトリア、カスピ海沿岸を侵した。

しかし、このときのコレラは、一八三〇年代のコレラ大流行の前触れにすぎなかった。一八二六年、ベンガル地方を震源地としたコレラは、今度は地球全体に波及していったのである。ヒンズー教徒の巡礼路に加えて、イスラム教の巡礼路もコレラ伝播のルートとなった。一八三一年にはコレラはメッカに定着した。

一方、インドから南ロシアに入っていたコレラは、一八三一年にはバルト海にまで到達し、そこからイギリスに伝播した。翌三二年にはアイルランドに侵入し、アイルランド人の移住者がカナダにコレラを持ち込み、さらに南下してアメリカ合衆国（一八三二年）、メキシコ（一八三三年）へと拡大していった。一九世紀半ば以降、蒸気船と鉄道の速度が増すにつれて、コレラは従来にもまして迅速に、かつ地球的規模で拡散していった。コレラにかかった者は短時間のうちに死亡する（数時間以内というケースもある）。コレラの真の脅威は、感染から死亡に至るまでの迅速さにあった。

一九世紀に蔓延したコレラを契機に、都市の環境衛生、保健行政、飲料水等を改善しようという改革運動が推進されていった。一八五三〜五四年にかけて、ロンドンではコレラにより一万人以上の市民が亡くなった。一八五六年に新設された首都土木庁の主任技師ジョゼフ・バザルゲットは、一八五九年にテムズ兩岸地域における下水道建設に着手するが、その完成によってコレラの発生は激減したといわれている。

他方でコレラは医学的にも大きな問題を投げかけた。感染説（接触伝染説）の立場から、人間のあいだの接触を重視

し、隔離検疫の有効性を信じていた医師や役人は概して、ヨーロッパ大陸のなかでも地中海地方に多かった。これに対して、北方ヨーロッパやイギリスでは、悪臭を発する塵芥や汚物が立ち昇る瘴気こそが病気の原因であるとする、いわゆる瘴気説（非接触伝染説）をとる者が多かった。

これに関連して、特にイギリスの自由主義者は、隔離検疫制を自由貿易の原則に対する不合理極まりない侵害とみなし、この制度の根絶に全力を傾けたとの指摘には、思わずひざを打った。一九世紀ともなれば、かの東インド会社の対中国貿易の独占権も廃止され（一八三三年）、一八五八年には東インド会社そのものも解散し、二五〇年余りに及ぶ歴史に幕をおろした。周知のように、その背景には自由貿易主義の発展があった。自由主義者の目には、隔離検疫制も自由貿易を阻害する大きな要因と映ったのである。

一八八三年にコレラがエジプトに襲来したとき、ヨーロッパ各国の医師団が現場に派遣され、わずか数週間うちにロベルト・コッホはコレラの病原菌の発見（一八八三年）を告げた。最終的には、感染説に軍配が上がったわけである。ところで、史上有名な戦争においても、疫病のために亡くなった者の数は想像以上のものがあつた。たとえばクリミア戦争（一八五三―五六年）では、イギリス兵は、赤痢による犠牲者のほうが、ロシア軍の銃剣に倒れた戦死者よりも一〇倍も多かった。ボーア戦争（一八九九―一九〇二年）でも、イギリス兵の病死者は、敵軍の軍事行動による死者の五倍にのぼった。また、普仏戦争（一八七〇―七一年）の際には、天然痘のため約二万人のフランス兵が戦闘不能に陥ったのに対して、敵のプロイセン兵は予防接種をおこなっていたお陰で、無事であつたという。

発疹チフスの伝播に際してシラミが果たす役割は、すでに第一次世界大戦前につきとめられていた。その結果、フランス兵の身体にも衣服にもシラミ駆除用の措置が講じられ、一九一四―一八年の間、北フランスの塹壕内に数百万の兵員を集結させるという未曾有の作戦を遂行することが可能になったのである。西部戦線において、発疹チフスがくいとめられた意義は大きい。



いわゆる新大陸の発見によって、旧大陸はジャガイモやトウモロコシといった収量の多い作物を得た。なかでも、やせ地や寒冷地に強いジャガイモの有益性については、多言を要しない。これに対して、新大陸が受け取ったのは、天然痘のような病原菌であった。これはまったくの不等価交換であった。アメリカの歴史家アルフレッド・W・クロスビーは、こうした不等価交換とその帰結を「コロンブスの交換」(Columbian Exchange)と呼んだ。

マクニールによれば、新大陸ではまず天然痘が到来して猖獗を極め、総人口の三分の一が失われた。次に、はしかが出現し、一五三〇年から翌三一年にかけて、メキシコとペルーに広がった。疫病に対する免疫をもたなかったインディオは、一挙に脅威にさらされることになった。文明との遭遇は、他方で病原菌との遭遇でもあったのである。

一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、世界は産業革命の一支脈ともいえる交通革命によって一体化が進む。具体的には汽船と鉄道の発達によって、人間の移動も盛んになった。移民の歴史がそれを如実に物語っている。病原菌の地理的移動はこれまで以上に容易になった。疫病の伝播に際しては、世界各地で活発化した軍事的活動も大きく関係していた。この時期に、それまでエンデミックであったペストやコレラがパンデミック化し、地球全体を覆ったのは決して偶然ではなかったのである。

.....

著者のマクニールは疫病を歴史形成の単なる一要因とみなすのではなく、世界史の重要な決定要因とみなす。だが、それは歴史の矮小化を意味しない。むしろ、歴史を見る眼、ないしは視野を拡げてくれる。すでに「病の文化史」では古典となっている本書であるが、壮大な歴史観ないしは文明観をひめた書物であり、現代のグローバリゼーションを考えるうえでも示唆に富む。ここで紹介した所以でもある。

読者のなかには、疫病が及ぼした社会経済的影響について、物足りなさを感じるむきもあるかもしれない。実際のと



ころ、黒死病のもつ社会経済史的な諸問題について、本書では立ち入った考察はなされていない。しかし、これは望蜀の念というものであろう。というのも、それ自体ひとつの大きな問題となっているからである。イギリス一国に限ってみても、黒死病とその影響については膨大な研究の蓄積があり、関連する著作も枚挙にいとまがない（\*）。

最後に翻訳について。訳文は、もうひと工夫あってもよいのではないかと思われる箇所もないわけではないが、全体的にみれば、読みやすいものに仕上がっている。「ポピュレーション」と「ニッチェ」については訳出が難しかったとみえて、カタカナ表記になっている。いずれも本文中に簡単な訳注が付されているが、原語はそれぞれ *population*、*niche* である。勿論、訳者自身は重々承知の上であろうが、「ポピュレーション」は「個体総数」、「ニッチェ」は「生態的位置」といった語意を念頭に置き、文脈に応じてさまざまな訳語を工夫すれば、読者にとってはよりわかりやすいものになったように思われる。蛇足ながら、*niche* を英語の発音に即してカタカナ表記するとすれば、「ニッチェ」ではなく、「ニッチ」もしくは「ニーシュ」であろう。

もとより、「横」のものを「縦」にただけでは、翻訳にはならない。翻訳者の語学力はいうまでもなく、日本語表現力、ひいては翻訳者自身の文化理解の深さが問われるからである。ここに翻訳の難しさがある。ともあれ、エポックメイキングな著作を平易な日本語で読めるようにしてくれた訳者の労を多としたい。

（\*）ごたぶんにもれず、イギリスにおいても、ペストはドーセット州のメルカム・リージスやサウサンプトン、ブリストルといったイングランド南部の海港都市から「上陸」した。この悪疫を生き延びた農民層の地位は改善され、逆に労賃の上昇、地代の低下といった状況下で封建領主層は財政的な困窮に陥った。総じて言えば、黒死病は農奴制の衰退、ひ

いては消滅をもたらしたのである。注意しなければならないのは、ペストは決して一過性のものではなかったということである。つまり、一三四八年以降も、他の疫病とともに約一世紀半にわたって散発的に猛威を振るい、経済の停滞を招いたのである。近年では、ブリテン諸島を襲った疫病は腺ペストないしは肺ペストではなく、炭疽症（anthrax）ではないか、ともいわれている。以上の諸点について、詳しくは次の文献を参照されたい。John Hatcher, *Plague, Population and the English Economy 1348-1530*, The Economic History Society, London, 1977; Colin Platt, *King Death: The Black Death and Its Aftermath in Late Medieval England*, University College Press, London 1996; David Herlihy, *The Black Death and Transformation of the West*, Harvard University Press, 1997; Graham Twigg, *The Black Death: A Biological Reappraisal*, London, 1984. なお、黒死病に関連する同時代の一次史料として、G.H. Martin ed. and tr. *Knighon's Chronicle 1337-1396*, Clarendon Press, Oxford, 1995. (年代記は本学メディアセンターにも所蔵されている)。